

歴史館まなび隊

4

片倉組（日本を代表する製糸会社）事務所の外観



1878（明治11）年、のちの片倉製糸紡績株式会社のもとになる垣外製糸場が、諏訪郡川岸村（現岡谷市）に、片倉兼太郎によってつくられました。兼太郎は松本などで工場を増やし1895（明治28）年には片倉組というグループに発展させました。

ここでは片倉組の事務所一階の外観を復原しています。この建物は、1910（明治43）年に建てられたものです。現在は、中央印刷株式会社の事務所

所として使われ、国の登録有形文化財になっています。

〈片倉組事務所の「煉瓦造」について〉

この建物は煉瓦造に見えますが、実は、外壁にこの頃流行していた煉瓦色のタイルを貼ったものです。

埴科郡西条村六工製糸場

ここは、1874（明治7）年、埴科郡西条村（現長野市松代町）にできた六工製糸場の復原です。そのころの日本は、蚕種（卵）や生糸が重要な輸出品でした。明治政府は日本を豊かにするために蚕糸業に力を入れました。六工製糸場は、1872（明治5）年につくられた官営富岡製糸場をモデルにしたフランス式製糸工場で、一度に50人が座って作業できることから「フランス式50人繰り」の製糸工場といわれました。



工場の蒸気釜や繰糸器械の考案者は松代藩士の海沼房太郎です。当時、地元にはボイラーはもちろん煮繭や繰糸の鍋、蒸気をとおすパイプなどをつくる技術がなかったの

で、蒸気器械をつくり出すことにたいへん苦勞しました。繭を煮る鍋は富岡のように金属製ではなく、松代焼の陶器を用いました。松代焼の鍋は凍みに強く、使いやすい利点がありました。

工場の動力「水車」、蒸気をつくる「ボイラー」はどこかな？(^)/

和田英 ～伝習工女の先がけ～

和田英は、幕末の1857年（安政4）松代藩士・横田家に生まれました。1873年（明治6）、15歳の英は、製糸技術を学ぶために富岡製糸場へ入場し、フランス人技師の指導のもとで努力を重ね、一等工女として認められるまでになりました。1874年（明治7）年に故郷に戻った英は、六工製糸場で工女たちの指導にあたり、地元の製糸業発展のためにつくしました。52歳の時に書いた『富岡日記』には、富岡製糸場や六工製糸場での出来事が記されています。



和田(横田)英 (長野県史より転載)